

Rapport (ラポール) とは、仏語で「信頼と親愛の絆」を表しています。
多摩大学広報誌「Rapport」は、多摩大学と多摩大学サポーターをつなぐ
コミュニケーション誌です。

発行者/多摩大学 発行日/2017年9月30日
東京都多摩市聖ヶ丘4-1-1 TEL: 042-337-1111 FAX: 042-337-7103
<http://www.tama.ac.jp/>

Rapport

多摩大学 | 広 報 誌 |

2017
Number
099-
100
合併号

多摩キャンパス

Vol.99-100 Contents

多摩キャンパス ALC 学修支援サービス	02
多摩大学「シルバー・デモクラシー企画」.....	02
2017年度 夏季SRC 発表.....	03
Rapport創刊100号記念 学長インタビュー.....	04-05
教育内容説明会 報告.....	06
経営情報学部後援会	
定期総会・教育セミナー 報告/就勝セミナー 報告.....	06
News	07
卒業生インタビュー.....	08

湘南キャンパス

「学修支援」から「学修サービス」へ

経営情報学部 准教授（学修サービス担当） 小西 英行

「学修サービス」窓口は、この4月よりアクティブ・ラーニング支援センター（ALC：図書館）内に設置されました。「学修サービス」という言葉は耳慣れないかもしれませんが、全国の大学等で整備が進んでいる「学修（学習）支援室」と基本的に同じもので、教職員が常駐して学生の多様な相談に対応しています（写真①）。「学習」は、「習い学ぶ」＝「学問を教えてください」という意味であるのに対し、「学修」は「学び修める」＝「自ら進んで勉強し、成果を修める」という意味があります。そして、学びに対する様々な相談をコンシェルジュとしてサービス（奉仕）することを意図し、「学修サービス」と命名しました。

本学の「図書館」が「アクティブ・ラーニング支援センター：ALC」と称しているのは周知ですが、これは「アクティブ・ラーニングの多摩大」を実践する場として「図書館」を位置付けているということです。知の宝庫である「図書館」で、「地域やグローバルの課題」を「情報通信技術：IT」を活用して主体的に学び成果を上げるための場所、ということになります。多摩キャンパスのALCには「図書貸し出し等のサービス」を行う「ライブラリー・サービス」窓口に加えて、「配布PCのメンテナンスやMOS試験等のサービス」を行う「メディア・サービス」窓口も、この4月よりALCに移転設置されました。そして「学修サービス」を、ALCの3大サービスの一つとして位置づけ、「知」と「情報技術」を活用して、主体的な学びをクリエイティブする場として展開しています。

2017年度春学期の実績としては、のべ300名以上の学生が相談に訪れ、その内容は「履修指導」、「レポート・ノートの書き方」をはじめ、「資格取得」、「就活」、「部活・サークル活動」、そして「人生相談」など、広範囲にわたっています。また、「プレゼミ」と連携した「図書館宝探しオリエンテーション」では、図書館で見つけた「お勧めの本」を紹介するグループワークを実施し、アクティブ・ラーニングを体験しました（写真②）。

秋学期は、プレゼミ連動企画「読書感想文コンテスト」に向けた「文章添削講座」や、要望が多かった「日商リテールマーケティング検定」や「秘書検定」等の資格取得勉強会などを予定しています。「学修サービス」では今後とも、学生の成長という結果にコミットしていきます。



写真① 学修サービス窓口



写真② 図書館宝探しオリエンテーション

多摩大学「シルバー・デモクラシー企画」

第1弾 山梨県南アルプス市で「田植え体験×講座」開催

2017年5月28日、「多摩大学 寺島実郎監修リレー講座」の受講者を対象に、農業体験を通してリタイア後の世代が新たな社会参画を考える企画として、10年後にリニア中央幹線が結ぶ山梨県南アルプス市と連携し「田植え体験×講座」を実施しました。

天候に恵まれた雄大な自然の中、地元で農業体験事業を行っているNPO法人「田舎暮らしの郷 南アルプスせせらぎ棚田倶楽部」の会員の皆様に指導をしていただき、30名の参加者が「田植え」体験に取り組みました。富士山を望む棚田で泥に足をとられながらも、約1時間半かけて一般参加者、杉田文章 経営情報学部長、小林英夫 学長室長、教職員全員で、苗を植えることが出来ました。

金丸一元 南アルプス市長も視察に訪れ、高齢者社会参画の趣旨への賛同と本企画への全面的な協力を約束いただき、その“場”として南アルプス市が「田植え」、「果樹」などに適した場であることを強調されるとともに、南アルプス市への移住についても紹介がありました。

田植えの後は宿泊施設「湧暇李の里」に移動し、同敷地内の「ふるさと文化伝承館」にて、南アルプス市教育委員会文化財課のご協力により、「縄文時代栽培の文化から棚田まで～南アルプス市の風土と歴史を中心に～」と題した講座を受講しました。縄文時代の土器が並ぶ館内での熱意あふれる講義に参加者全員が熱心に聞き入り、本講座企画の主眼である「縄文時代から現代のキーワードである持続可能社会を示唆する」講座になりました。土器に直接触れ、縄文時代を実感できる実習もあり、非常に充実した時間を過ごしました。

帰路のバス車内では、参加者同士、会話も弾み交流する様子が見られ、次回の農業体験企画への期待が高まりました。今年度は今回の田んぼでの「稲刈り」を含む、あと2回の体験企画を実施予定です。



雄大な自然の中で「田植え」体験



「湧暇李の里」にて集合写真



講義後、縄文土器に触れる実習

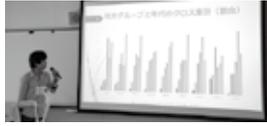
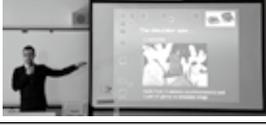
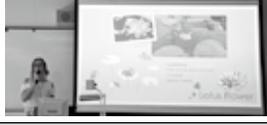
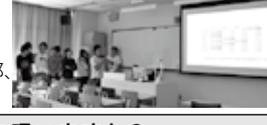
2017年度夏季SRC (Student Research Conference) 発表

2017年7月15日、多摩キャンパス211教室にてSRC (Student Research Conference) が開催されました。SRCは経営情報学部の学生が研究成果を発表する場で、年2回(夏・冬)行われています。今回のSRCでは18件の発表があり、発表時間は1件につき発表5分と質疑応答5分の合わせて10分が与えられました。

質疑応答では学生や教員から、「このテーマを選んだ理由は?」「どのような情報源を基にしたのか?」「データの収集方法は?」「仮説をもっとひねった方がよいのでは?」「オープンデータを使用する利点は?」「データから結論が出ていない」「他のデータにも気を配れば、より幅広い調査になる」「画像が美しい」など様々な質問や意見、アドバイスがありました。



プログラム

<p>「意外と知らないゲーム業界」</p> <p>久保田貴文ゼミ 中山 貴文、工藤 春哉</p> 	<p>「コカ・コーラ本当に人気なの?」</p> <p>久保田貴文ゼミ 安藤 元樹、小原 慎逸クリスピクター、 佐藤 啓太</p> 
<p>「スクールバスの利用状況」</p> <p>多摩データサイエンス研究会 工藤 春哉、安藤 元樹、荒井 綺花、 金木 雄也、角田 寛幸</p> 	<p>「大学生は何にお金を使っている?」</p> <p>多摩データサイエンス研究会 稲庭 克洋、阿部 慎吾、磯野 萌々香、 小原 慎逸クリスピクター</p> 
<p>「防災のためのオープンデータの利活用とその視覚化について」</p> <p>久保田貴文ゼミ 角田 寛幸</p> 	<p>「洋服通販サイトにおける地方ごとの購入動機の傾向」</p> <p>久保田貴文ゼミ 先田 剛</p> 
<p>「Designing a Fantasy Dragon」</p> <p>彩藤ひろみゼミ / UCO Laval Aristide AUZERAIS</p> 	<p>「AR social world sharing with Google Tango」</p> <p>出原至道ゼミ / ESIEA Antoine ALTORFFER</p> 
<p>「Wingsuit Simulator using Virtual Reality」</p> <p>出原至道ゼミ / ESIEA Arnaud PIRIOU</p> 	<p>「Walk Through in a VR Temple Garden」</p> <p>彩藤ひろみゼミ / UCO Laval Victoria ROULLAND</p> 
<p>「企業格付けと平均年収」</p> <p>今泉忠ゼミ 若山 大亮、福島 智就</p> 	<p>「ダイヤモンドの価格とは」</p> <p>今泉忠ゼミ 丸樹 汰右、上里 幸三</p> 
<p>「新しい体形、、、欲しくない?」</p> <p>大森拓哉ゼミ 小林 巧也、中島 大地、岸 遼太郎、 石塚 瑠奈</p> 	<p>「昨日の睡眠は体に負担! ?」</p> <p>大森拓哉ゼミ 恩地 海太、小嶋 大輔</p> 
<p>「君は知ってた? 学歴で給料に差が出ることを!」</p> <p>大森拓哉ゼミ 長谷川 冬弥、鈴木 海偉、津川 誠</p> 	<p>「SD法によるイメージの因子分析」</p> <p>大森拓哉ゼミ 石川 将基、梅沢 万結、YAN YUN、上野 一将、 澤田 千尋、小杉 拓哉、ZHOU MENG YING、 篠原 大輔、坪井 優吾、矢田 慎之佑、小島 龍郎、 角田 信鳳、中山 凱、中島 麻莉奈、千葉 航輝</p> 
<p>「理想の身体を手に入れちゃおう!」</p> <p>大森拓哉ゼミ 土屋 智博、西村 智也、木谷 花子</p> 	<p>「あなたはこれでもタバコを吸いますか?」</p> <p>大森拓哉ゼミ 渡嘉敷 大智、小野寺 亮、荒川 美奈</p> 

学長イン

多摩大学学長
寺島 実郎



実学重視の人間教育

小林「2009年に多摩大学の学長に就任されてから8年、様々な改革に取り組んでこられました。今日までの手応えをお話いただけますでしょうか」

学長「多摩大学が開学した1980年代の終わりから1990年代の初めは、まさに日本経済がバブルといわれた時代です。開学の趣旨を読むと、『グローバル化×IT革命』という問題意識をもった人材の創出という思いがあったことがよくわかります。」

大学には、教員自身の専門性と知見を深めていく『研究』と学生を育てる『教育』という2つの分野があります。私は多摩大学の改革の一つとして、まず『教育』に力を入れた大学としての輪郭をしっかりと描いていこうと考えました。そこで、『現代の志塾』を教育理念として実学を重視し、時代に立ち向かう力を持った人間を育てることに力(りき)を置いたのです。

私は多摩大学の名称にある『多摩』という地域にとっても強い思いを持っています。多摩川と相模川に挟まれた大きな三角地帯、三浦半島なども含めた広域多摩という地域に根差したある種のDNAを大事にして、これを掘り下げていけばいくほど実はそれがグローバルなテーマに繋がります。多摩地域はかつて幕府の直轄地、いわゆる天領で、近藤勇や自由民権運動など歴史が物語るDNAを掘り下げると、それが日本史や世界史にも繋がっていきます。ぜひこの地域に根差した教育を試みたいという思いがあり、『多摩学』として多摩ニュータウンが抱える課題などに取り組みながら、歴史との相関の中で研究を深めています。行政や地域の企業とも連携して、グローバルとローカルを掛け合わせた『グローカリティ』の問題意識が我々が抱えていくべきテーマではないかと考えています。

グローカリティチャレンジの1つとして、年間24回開講する『現代世界解析講座 多摩大学寺島実郎監修リレー講座』があります。学生だけでなく地域の社会人も受講し、今日まで10年間で延べ11万人を超える方々に参加していただいています。創立25周年記念ファシリティ『T-Studio』は、学生と地域の社会人が共に議論したり、勉強したりできる磁場となるような場所を想定しています。1階にはカフェラウンジやセブン・イレブンがあり、地域の人たちの止まり木として勉強会や研究会への参加を促すなど、次第に現実化してきています。これは創立25周年から30周年に向けて、多摩大学にとって大きな前進だと思っています」

地域の拠点としての役割

小林「多摩ニュータウンは高齢化が進むなど環境的にも変化しています。大学も人を育てる教育面と地域のアカデミズム拠点としての面、地域の変化の中で新しい姿を見出しているのですね」

学長「多摩大学設立時に目指した『グローバル化』という言葉にも光と影の部分が見えてきました。さらにIT革命が一步前進し、ビッグデータや人工知能といわれる時代が訪れています。新しい時代条件を組み込んだステージに入っていかなければならない。それが今後の多摩大学の大きなテーマになっていくのではないかと思います」

小林「地域の拠点としての役割と学生の教育は、どのように絡んでいくのでしょうか」

学長「多摩大学が地域高齢者の社会参画のプラットフォームになってきています。現在、多摩市、UR都市機構と連携し、多摩大学の学生が多摩ニュータウンの団地に住み、近隣住民とのコミュニケーションを深めながら地域貢献に参画しています。リレー講座に参加

していただいている地域の人たちにもアクセスして、どのような人がどのような問題意識を持ち、どのような歴史を重ねて住んできたのかなどについて、ヒアリングをしながらデータベースを積み上げています。学生はフィールドワークの中で、今後自分が背負っていくべきテーマが何かを身をもって体験していきます。学びというのはフィールドワークと文献研究の相関だと考えています。できるかぎり現場に近いところに立ち、フィールドの現場を感じ取り、さらにその体系性を理解するために文献を読み漁ることです。フィールドと文献という緊張関係の中で、知見はどんどん深まります。大学が提供する知的緊張感は非常に大事で、そのような方向に少しずつ何かが見えてきたように感じています」

インターゼミで切磋琢磨

小林「インターゼミ(社会学研究会)では、ご自身が直接、学生を指導されています。学生と触れ合うことで、どのようなことを感じ取られていますか」

学長「インターゼミのおもしろいところは、大学院生が多く参加していることです。多摩大学の大学院には、すでに社会で10年以上の実務経験を積んだ人たちが学んでいます。教員も10人以上参加しているので、教員と大学院生、大学院のOB、学部の学生が連なって、1つのテーマでチームをつくり、議論し、刺激し合いながら1年かけて研究します。インターゼミが社会学研究会という名称をつけているのは、社会的な課題を解決するためのゼミだからです。企業でも社会工学的なアプローチが非常に大事で、そのための実践研究の場だという思いでインターゼミを積み上げてきました。大学院生の熱意に学部生も引っ張られ、課題研究の中身も年々クオリティが上がってきています」

小林「そのような場にあえて参画しようという意欲がある学部の学生は、どんどん受け入れていくということですね」

学長「学びというものは、どんなに優秀な先生が指導したとしても、主体的に自分から学ぶ意志がない状況では成り立ちません。ある種の刺激や考えるヒントを受けて、気づきが自分の行動につながることを学生が感じ取れるようにすることが、大学にできることだと思います」

小林「大学は学生に対して積極的に様々な刺激や主体的な部分を引き出せるよう気づきの機会を与えるということですね。学長は毎年イン

創刊 100 号記念

タビュ

経営情報学部教授
学長室長

小林 英夫



ターゼミで学生に自分ノートをつくるよう提案されているようですが」
学長「人生における課題解決を意識して、定番のように言っている話があります。一つは『ヒューマンリレーションマップ』、つまり自分が持っている人間関係のマップを書き出してみる。自分にとって本当に信頼ができて、説得すれば自分のために動いてくれる人間のマップです。親兄弟というものがコアかもしれないけれど、友だちや先輩、先生にもアタックし、自分の額に汗して努力してつくり上げた人間関係のマップを1年に1回、若いうちに書いてみることで。1年経ってそのマップが全く広がりもしていないような人生は、成功するわけがありません。努力に報いた形でしか人間関係はつくり上げられないのです。『情報』という言葉の通り『情けに報いる』人間関係をつくり、本当に困ったときに相手の目を見て語り、この人のためだったら自分の力を尽くしてサポートしようという思いにさせる人間関係を、友だちでも先生でもつくっていかなければ人生における課題を突き破っていくことはできません。

もう一つは『アセットマップ』です。自分にとって資産だと思えるものは一体何か、いくらお金を持っているかも確かに資産かもしれないけれど、自分が取得した資格なども含め自分のアセットだと思えるものを1年に1回、正直に書き出してみることで。去年のマップとどう変わっているのか。目に見える形にして自分の資産が増えている人生は、一向に前進していないのと同じです。去年一昨年のマップと今年も全く同じであれば、自分自身の人生を見直したほうが良いかもしれません。ヒューマンリレーションマップとアセットマップを書くことで、自分の人生の進捗状況を確認してごらん、とインターゼミの学生には毎年言っています。自分自身に問いかけてみることは非常に重要で、それは人生をごまかしなく生きることの大きな証なので力を込めて伝えています」

学び続ける人を支援する大学

小林「多摩大学を卒業後、社会人として何年か経験し、いろいろと悩んでいる人も今の自分を見つめ直して前進しようとしています」

学長「私自身、学び続けなければという緊張感を実感する昨今です。科学技術はすごいスピードで進歩しています。21世紀に入ってまだ16年位しか経っていませんが、コンピュータサイエンスの発展を背景に生命科学は進化し、人間とチンパンジーのDNAの差も詳細にわかるようになってきました。AI（人工知能）もどんどん進化し

て、人間の知能を超えるコンピュータが登場してくるかもしれない時代に入りつつあります。大学の4年間、大学院も加えて6年間勉強したことだけで人生を生きていけるほど甘くはない状況にあります。刻々と時代が変わり技術が進化していく中で、世界の見え方が変わってきている。私が大学を卒業した当時は、勉強して良い企業に入り定年退職まで勤めれば、後は第二の人生という言い方で余生を過ごせました。ところが今、異次元高齢化社会というのか、仮に60歳で企業を定年退職しても第二の人生では済まない。そこから40年も生きなければならなくなる。高齢化社会はお年寄りだけの話ではなく、学生にとっても息を飲むほど長い時間を生きていくことになるという現実があるのです。大学で卒業証書をもって知的基盤は完成したという時代ではなく、次々と新しい情報が入ってくる中で、学び続けなければならないのです。

その中で大学が果たす役割は非常に重要で、多摩大学大学院では社会に出てから10年以上経った人が学び直し、再武装するためのカリキュラムを意識しています。大学を卒業して終わりではなく、大学とのネットワークが自分を支えてくれることにも気付いてほしい。今、大学が立ち向かっているテーマに少しでも関心をもって向き合い、自分が卒業した多摩大学がこんなに変わってきていること、今でも自分が扉を叩けば受講できる講座や教えてくれる先生がいることに気付いてもらいたい。それが私の考える実学です。私たちの年代になっても毎年ものすごい勢いで学ばなければならないのです。今、学びの拠点としての多摩大学は、大学生だけではなく社会に出た人たちも呼び寄せて発展していく新しいステージに入っているのだと私は思っています。

先ほどお話ししたインターゼミは、九段下にある多摩大学のサテライト教室で開講しています。ここを学びの場としたのは、すぐそばに神田の古本屋街など知的な基盤があるからです。私は岩波書店の『世界』という雑誌に『脳力のレッスン』という論稿を15年以上毎月連載していますが、1本書くごとに九段下にある『寺島文庫』に約100冊の本が増えます。それぐらい新しいものを吸収していく努力を続ける必要があるのです」

社会参画のプラットフォームとして

小林「学びとは新たに吸収ができる楽しいことかもしれません」

学長「確かにそうです。それこそが戦闘力です。気が重くなるような義務としての学びではなく、学べば学ぶほど見えてくるもの、世界観が変わってくるものです。そのことによって課題解決力もまったく違って来る。一段階高い問題解決力が身につくし、その解決のプロセスを通じてつくり上げられる人脈やネットワークがまた次のステージを呼び起こす、そういうものだと思います」

小林「最後にご父母に向けて、メッセージをお願いします」

学長「ご父母の方々にも、先ほど話題にしたリレー講座などに参加し、登壇する先生たちの問題意識に触れてみていただきたいと思います。きっと、ご父母としてだけでなく社会に生きている一人の存在として、今、どのような問題意識をもって時代に向き合うべきかを考える上でとてもプラスになると思います。今後も多摩大学が地域や社会を繋ぐためのベースとしての役割を担っていければ、これほど望ましいことはありません。ご父母の皆様には、そのような目線で関わっていただけることを私は期待しています」

小林「ありがとうございました。学長にしっかりと引っ張っていただきながら、これからも多摩大学は皆様の社会参画のプラットフォームの役割を果たしつつ、社会に貢献していきます」

2018 年度入試に向けて、多摩大学の教育内容を説明

2017年6月9日多摩キャンパス、23日湘南キャンパスにて、「多摩大学入学試験・教育内容説明会」を開催しました。同説明会は高校・予備校等の教員の皆様を対象とするもので、今年も多摩大学に関心をお持ちの多くの方々の参加がありました。

多摩キャンパスにて開催された説明会では、第1部の「基調講演」において、寺島実郎学長が「日本の教育に問われるもの」と題して、多摩大学インターゼミ、アジアダイナミズム、グローカリティ、シルバー・デモクラシーなどをキーワードに語りました。続く久恒啓一副学長の講演「大学改革の『多摩大モデル』」

では、多摩大が開講する3タイプのゼミ（プレゼミ、ホームゼミ、インターゼミ）やアクティブ・ラーニングプログラム、就職関連情報などについて解説しました。第2部の「教育内容・入学試験概要説明」では、安田震一グローバルスタディーズ学部長、杉田文章 経営情報学部長が各学部の概要と特長などについて紹介しました。また、志賀敏宏 経営情報学部入試委員長は、「志」AO入試・推薦入試・一般入試について説明をしました。第3部の「個別相談会・懇親会」では、参加者からの問いかけに教職員が対応するなど、会話を重ね交流を深めました。



寺島実郎学長



久恒啓一副学長



安田一グローバルスタディーズ学部長



杉田文章 経営情報学部長



入試についての説明



懇親会の様子

経営情報学部 後援会

定期総会・教育セミナー 開催

2017年6月25日、多摩キャンパスにて「経営情報学部後援会定期総会・教育セミナー」が開催されました。当日は後援会定期総会と併せて、学内施設の見学ツアー、教育セミナーが行われ、多くの保証人の皆様の参加がありました。

○後援会定期総会

第1号議案（2016年度事業報告（案）・決算報告（案））、第2号議案（2017年度事業計画（案）・予算（案））、第3号議案（2017年度後援会役員選任）について審議され、いずれも承認されました。

○教育セミナー 第1部

始めに浅田誠造後援会長からの挨拶、続いて久恒啓一副学長による講演「大学改革の『多摩大モデル』」がありました。杉田文章

経営情報学部長は「経営情報学部の教育方針」と題して、カリキュラムやアクティブ・ラーニングなどについて説明を行いました。その後、学生による「学び・挑戦・志の報告会」があり、3名の学生がそれぞれの海外研修や留学プログラム、就職活動などの体験について発表しました。

○教育セミナー 第2部

各教室に移動して、保証人の方々とゼミ担当教員とのゼミ別懇談会、またアクティブ・ラーニングプログラムや就職相談・履修・留学・学生生活の状況などについて教職員との個別相談会も実施し、情報交換や質疑応答など保証人の皆様と教職員が直接交流できる有意義な時間となりました。



定期総会の様子



久恒啓一副学長の講演



杉田文章 学部長による説明



学生による報告



ゼミ別懇談会の様子

就勝セミナー 開催

2017年9月16日、多摩キャンパスにて「経営情報学部後援会就勝セミナー」を開催しました。教職員による講演や学生によるパネルディスカッションなどを通して、多摩大学の就職活動に関する取り組みや最新の情報を保証人の皆様にお知らせしました。

○第1部〈講演〉：始めに浅田誠造後援会長による就勝セミナー開催の挨拶があり、杉田文章 経営情報学部長は「多摩大生が強みを発揮する志企業とは」と題して、就職支援に関する課題や就職の質を高めるための取り組みなどについて講演しました。中庭光彦 経営情報学部就職委員長は「多摩大学の就職実績・就職支援体制について」で、2016年度の就職実績、就職支援体制、就活環境の変化、学生がすべきことについて講演しました。また、

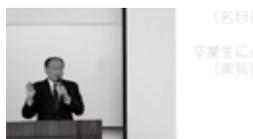
浜田正幸 経営情報学部就職委員の講演「就職活動最前線」では、就活スケジュールを示しながら、今年の就活の特徴や就勝作戦について解説しました。経営情報学部キャリア支援課 高野滋彦課長はキャリア支援課スタッフを紹介し、講演「キャリア支援課職員が語る就勝へのヒント集」の中で、サービスの概要、保証人の皆様にご協力いただきたいことなどをお伝えしました。

○第2部〈学生による就勝体験報告〉：就職活動を終えた学生5名が、就勝のポイントなど就職活動の本音を語り合いました。

○第3部〈ゼミ別懇談会・個別相談会〉：ゼミ別に各教室に移動し、保証人の皆様とゼミ担当教員が大学やご家庭における学生の生活、学習、就職活動などについて和やかに意見交換をしました。



杉田文章学部長の講演



中庭光彦就職委員長の講演



浜田正幸就職委員の講演



学生による就勝体験報告



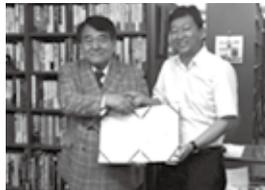
ゼミ別懇談会の様子

中国・雲南民族大学と学術交流協定を締結

湘南キャンパス 国際交流センター事務課 チェン ウェンチー 鄭文琪

2017年6月27日、中国・雲南民族大学（YUNI）の陳魯雁書記と寺島実郎学長は多摩大学九段サテライトにて調印式を行い、今後の積極的な教育学術交流の促進に合意しました。豊かな民族文化や美しい風景により多数の観光客が訪れる雲南省の省都昆明にキャンパスを構える雲南民族大学は、中国少数民族のエリート人材育成を主とする総合大学です。哲学、経済学、法学、教育学、文学、歴史学、理学、工学などの学科があり、なかでも東南アジア諸国と隣接する立地を生かした東南アジア研究や国際交流は全国的に有名です。今回の協定により、雲南民族大学と本学との間では、学生や教職員の交換留学プログラムの構築など、教育及び研究面における積極的な連携を約束しました。

調印式翌日の28日、雲南民族大学代表団は、安田農一 グローバルスタディーズ学部長の案内で小野秀樹 藤沢市副市長を表敬訪問しました。2018年から2020年、3年連続のセーリング・ワールドカップ及び2020年オリンピックでセーリング競技が藤沢市江ノ島で開催されるにあたり、雲南民族大学は必要な語学人材の養成や派遣に関して本学及び藤沢市と一層の連携を図りたいと今後の展望を構想しました。



調印式の様子
（左：寺島実郎学長、
右：雲南民族大学陳魯雁書記）



藤沢市役所表敬訪問の様子
（左1：陳魯雁書記、
左4：安田学部長、右：小野副市長）

中国・上海東海職業技術学院とサマープログラムを実施

経営情報学部 准教授 バートル 巴特尔

多摩大学において、2017年7月3日～7日までの5日間、海外協定校である上海東海職業技術学院（中国・上海市、以下上海東海学院）から来日した同大の教員（2名）・学生（7名）とサマープログラムを実施した。今回のプログラムは、多摩大学と上海東海学院との間で昨年締結した学術交流に関する包括的な交流協定に基づき、両大学の教員・学生に相互理解と異文化体験を促進する機会を提供すると共に多摩大学の学生に対して学修意欲の向上と海外留学への喚起を目的として行われた。滞在期間中、上海東海学院の学生と本学の学生が合同で講義を受講したり、お互いの歴史や文化を紹介する発表会を実施した。このほか、「ゼミカの多摩大」の強みを活かし、各ゼミや大学OBを動員し日本文化を体験してもらうための茶道教室、そして浴衣の試着も行い、更にはサントリービール工場の見学と短期間ではあったが盛りだくさんのプログラムを満喫していただいた。

今秋、多摩大学から教員2名、学生15名の陣容で上海東海学院を訪問し、相互理解をより深める予定である。複眼的に物事を考える視点を学生たちが養うと共に、教員同士も非常に有益な交流の機会であり、今後も継続していきたい。



久恒啓一多摩大学副学長、項家祥上海東海職業技術学院学長、杉田文章経営情報学部長



多摩大学OBと上海東海学院の学生たち



上海東海学院の皆様

多摩大学大学院 MBA 特別体験講座 開催

多摩大学大学院は、幅広い年代の方々学ぶ社会人のための超実学志向ビジネススクールです。2017年7月30日、品川クリスタルスクエアにて、本大学院の入学に関心がある方を対象に特別体験講座を開催しました。世界が混迷する中で、なぜ、今、あらゆるビジネスパーソンに「知の再武装」が必要とされるのか、なぜ本大学院で学ぶ価値があるのか、「混迷する時代における知の再武装と7つの知性」をテーマに寺島実郎学長と田坂広志 多摩大学大学院教授が講演を行いました。寺島学長は、講演「知の再武装を必要とする時代～異次元高齢化の時代に～」において、激動の時代を生き抜くためには人生にも戦略が必要であり、その戦略の鍵となり、人生を飛躍させる「知の再武装」について語りました。田坂教授は体験講座「21世紀のイノベータが活用する“目に見えない6つの資本”」において、智慧が経験や人間からしか学べないこと、関係、信頼、評判、文化、共感などの資本、7つの知性などについて講演しました。また、徳岡晃一郎研究科長は、本大学院の学びで得られること、プログラムの概要と5つの特長や強み等、大学院の内容に関して説明しました。当日は多くの社会人の方々が参加し、熱心に聞き入っていました。体験講座終了後には、個別入学相談も行い参加者の質疑に応じました。



寺島実郎学長の講演



説明に聞き入る参加者



田坂広志教授の体験講座

経営情報学部 秋季 卒業のつどい

2017年9月16日、経営情報学部「卒業のつどい」が行われ、杉田文章学部長より今年度の秋季卒業生に卒業証書が授与されました。杉田学部長は「今は人生100年といわれる時代。社会人として仕事を頑張りながら、自分の人生を輝かせるためにはもう一度あるいは二度学びの期間を得ることが必要です。ゴールまでは遠く長い道のり、タフに一步を踏み出してほしい。卒業生として今後も多摩大とつながりを持ちながら、元気いっぱい活躍してください」と祝福の言葉を贈りました。中庭光彦就職委員長は「変化が激しい社会の中で、変化に対応するには多摩大学で培ってきた考える力が必要です。考える人は社会や仕事の現場でリードする側の人になっていきます。皆さんがますます愛され必要とされる人に成長していくことを期待しています」と祝辞を述べました。卒業生は「新たに踏み出す道はなだらかかもしれないし、想像を超える現実が待ち構えているかもしれない。多摩大学で学び得た知恵を忘れずに歩み続けていきたいと思えます」と感謝の気持ちを答辞に込めました。全員で学園歌を斉唱し、終了後の卒業パーティーでは、卒業生、保証人様と教職員が穏やかな雰囲気の中で語り合いました。



卒業生と教員

卒業生インタビュー

高い志をもって社会で活躍している多摩大学の卒業生たち。大学で身につけた力が今、社会でどのように生かされているかを聞きました。

※所属や肩書などは取材当時のものです。

ピクスタ株式会社 代表取締役社長 **古俣 大介** 経営情報学部 2000 年卒業

経営情報学部

誰もが才能を活かせる世界をつくりたい。多摩大学が自分にチャンスくれたように。

学生時代に取り組んだこと

学生時代に親戚が住むイスラエルに渡航し政情不安の中に暮らす人々の姿に接したこと、滞在中に読んだ孫正義氏の本に衝撃を受けたことが人生の転機となりました。孫氏がビジネスを成功させたのは大学時代、そのスケールの大きさに私は心を打たれました。起業を志し、エキサイティングな毎日を通じたい、という思いを改めて強くもつようになり、自分の人生は大きく変わりました。勉強にも積極的に取り組み、著名なビジネスパーソンの名前が次々と飛び出す井上宗迪教授の講義は、まさに「世界に通じる窓口」そのものでした。講義を録音し自ら週末勉強会を企画するほどのめり込んだ経験は、知的好奇心や行動力の土台になっていると感じます。

社会人になって思うこと

大学4年生の頃、起業にチャレンジし、学部の友人の助けを得ながら EC サイトを開設してコーヒー豆の販売を始めました。金融分野のゼミに参加していましたので、実際に事業をスタートしたことで学びが一段とリアルなものになりました。積極的に求めれば、惜しみなく学びのチャンスを与えてくれる。そのような多摩大学のスタンスが、経営者への挑戦を始めた自分に大きな勇気を与えてくれたのです。現在、手がけているビジネスは、プロ・アマ問わず幅広い方から投稿されたデジタル素材を低価格で提供するオンラインマーケットプレイスの運営です。あらゆる方が自分の才能を自由に活かせる世界をつくりたい、と考えています。多摩大学では先生方が、自分を含め学生に対して「フラットな機会」を提供して下さったことありがたく思っています。

(インタビュー：2016年10月実施)



Profile

インターネット関連企業に入社後、起業の志を実現するため退社。販促デザイン事業、美容健康グッズの EC 事業を経て、2005年8月にピクスタ株式会社の前身である株式会社オンボードを設立、デジタル素材のマーケットプレイス運営を開始。2015年9月に東京証券取引所マザーズ市場に上場したピクスタ株式会社の経営者としてサービスの開発に注力している。

株式会社エイチ・アイ・エス 関東営業販売グループ 渋谷本店国内セクション **松下 素直** グローバルスタディーズ学部 2015 年卒業

グローバルスタディーズ学部

自分をとことん見直すこと。その向こうに新たな可能性が広がっていく。

学生時代に取り組んだこと

3年生の夏休みに語学研修に参加し、イギリスのシェフィールド大学へ。韓国やタイなどさまざまな国の学生とディスカッションを重ねる中で、視野の広がりを感じました。入学時から TOEIC の点数が 300 点近くアップしたことは、多摩大学でつかんだ大きな成果。自分の興味や志向を見つめ直し、本当にやりたいことを明確にできた4年間だったと思います。そのきっかけと方法を与えてくれた授業が、佐藤美津子先生の「キャリアビジョン」です。幼い頃までさかのぼり徹底的に自己分析に取り組んだ体験が、自信を与えてくれたと思います。就職活動で挫けそうになったときは、授業のレポートを何度も読み返して自分を勇気づけました。

社会人になって思うこと

就職活動中はキャリア支援課の方々にお世話になり、就活以外でも職員の方々のサポートが行き届いていたと思います。現在、エイチ・アイ・エスで旅行コンサルティング業務に携わっていますが、相談に来られるお客様は 100 人 100 通りのご要望をお持ちです。そのご要望を旅行プランにまとめてご提案する仕事は、まさに 100 通りのプレゼンテーションをしているようなもの。もともと人前で話すことが苦手だった自分がこの仕事を楽しめているのは、大学時代に萩原浩一先生の授業を受けたおかげです。ニュースなどを題材に自分の感じたことを発信する練習を積み、伝達力やコミュニケーションスキルを培いました。お客様の旅行プランがまとまって、「楽しみだね」と話している声を聞くと、自分のことのように嬉しくなります。

(インタビュー：2016年11月実施)



Profile

2015年4月に株式会社エイチ・アイ・エスに入社。以来、渋谷本店にて、国内旅行を中心としたカウンターセールスに従事している。少しずつ顧客のリピーターが増え、信頼関係を築いていくことの喜びとやりがいを実感している。

お知らせ

多摩キャンパス 2017年 **11月11日(土)・12日(日)**

経営情報学部

第29回 多摩祭 グローカル・フェスタ 2017 in TAMA

〈ホームカミングデー〉11月12日(日) 14:00～T-Studio

湘南キャンパス 2017年 **11月4日(土)・5日(日)**

グローバルスタディーズ学部

第11回 SGS Festa

〈ホームカミングデー〉11月4日(土) 18:00～カフェテリア